



TITLE:

(随想)佐谷有吉先生の追憶談

AUTHOR(S):

谷村, 忠保

---

CITATION:

谷村, 忠保. (随想)佐谷有吉先生の追憶談. 泌尿器科紀要 1960, 6(3): 153-154

ISSUE DATE:

1960-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/111923>

RIGHT:

# 泌 尿 器 科 紀 要

第 6 卷 第 3 号

昭和 35 年 3 月

## 随 想

### 佐 谷 有 吉 先 生 の 追 憶 談

大阪大学名誉教授 谷 村 忠 保

佐谷有吉先生は去る32年9月23日御逝去になつたので、本年は3周年に当る。よつて去る9月19日大阪国立病院で日本泌尿器科学会関西地方会が開かれ、それを先生の追憶会に当てられた。当日私は先生に最も長く師事した者の1人として先生に対する追憶談を述べた。その要旨を次に略記する。

先生は皮膚科、泌尿器科方面に於て偉大なる足跡を残されたが、本日は専門科の都合上、主として泌尿器科方面のことを述べる。しかもその履歴などは既に日本泌尿器科学雑誌、レブラ誌等に記載されているから、私はここでは私の体得したことと及び私が先生から直接お聞きしたことに止める。

先生は明治44年11月東京帝国大学医科大学医学科を卒業し、東大皮膚科に入り、土肥慶蔵教授の許に副手を命ぜられ、直ちに大学院に入学された。その時土肥教授は先生に将来泌尿器科を専攻するように指導されたが、先生の泌尿器科への精進は既にこの時に初まる。

在局2年半後、大正3年8月京都府立医学専門学校教諭兼同附属病院皮膚科部長として京都に赴任された。ここでは専門の教授研究中、特に淋疾の診断治療に力をそそがれ、これを科外に講ぜられたが、これが後に「淋疾の診断及び治療」なる単行本として刊行された。これは今は絶版になつているが、誠に立派な書物で、私もそれによつて大いに啓発される所があつた。

その後3年半を経て欧米に留学されたが、当時は丁度第1次大戦の時で、先ずアメリカに渡り、バルチモアに於て生理学教室に於て尿管の生理について研究された。これが後に「尿管の実験的研究」なる学位論文となつた。次でジョン・ホップキンス大学のヤング教授について泌尿器科を研究され、しかもそこでは志願助手として患者診療に従事し、また教室員と共に手術にも携さわつたとのことである。

その後歐洲に渡り諸国を見学周遊して大正8年6月帰朝された。そして京都へは帰らず、再び東大皮膚科に於て土肥教授の指導を受けられた。当時（大正11～12年）私も東大皮膚科に於て勉強していたが、先生からは公私共多大の御交誼に預つた。

次いで先生は三井慈善病院皮膚科長に就任されたが、当時の同病院外科長は青山徹蔵先生で、先生とは肝胆相照す仲で公私共非常な親交のあつた方である。青山先生は楠教授の恩師で、楠教授が佐谷先生の跡を継がれたことは、誠にくしき縁のあることと思われる。

阪大初代の皮膚科教授であつた桜根孝之進先生は大正15年（昭和元年）8月辞職され、その年の11月佐谷先生は後任教授として東京から来阪された。当時の大阪の教室は割合少

人数であつたが、その後佐谷先生を慕つて集る者多く、後にはおしもおされもせぬ大教室になつた。

桜根先生は、もと外科出で大阪医学校教諭、同附属病院外科医長をも勤められたが、皮膚科転向後はあまり大手術には手を染められなかつた。然るに佐谷先生は泌尿器科のあらゆる方面の診療、手術に従事せられ、これによつて以前の面目を一新した。

佐谷先生は大阪来任後日夜教室の発展に尽され、教室の隆昌は目ざましいものであつた。その手腕は広く認められ、後に大阪帝国大学医学部附属病院長、同医学部長に選任され、また後に出来た同附属医学専門部長などの要職に就かれ、阪大のために大いに貢献された。その中でも特記すべきは大阪帝国大学創設（昭和6年）に尽力されたことである。即ち当時の大阪医科大学楠本学長を助けて、正に流産せんとする案を、先生が縁故者をたどつて百方奔走し、明日より議会在休会になるうとする前夜半、この案が貴族院を通過して大阪帝大が誕生した。このため楠本先生はその後佐谷先生を公私共に庇護されたがさもあることである。

桜根先生は辞職の前年大阪の一特志家から多額の寄附金を受けられ、これによつて癩の研究を依頼された。桜根先生はこれを佐谷先生に委ねられ、それによつて大阪皮膚病研究所が設立された。そして阪大病院の一角に研究所の建設に至り、後にこれが阪大微研癩研究治療部となり、今日益々癩の研究、治療、特に鼠癩の研究が行われ、その名声は内外にひびき渡っている。またここで本邦最初の癩の専門雑誌（レブラ）が発刊され、後にそれが日本癩学会の機関誌となり、今日益々発展に至っている。

先生は昭和21年3月定年退職され大阪国立病院長に就任されたが、ここでも名院長として院の内外に聞え高く、本邦国立病院の先端を行く模範病院に建て上げられた。

昭和22年4月先生主宰のもとに第14回日本医学会が開催された。会頭は楠本先生で、先生は副会頭であつたがその前、会頭が逝去されたので先生によつて開かれ、しかも戦後非常に困難なる時期に於て、また周囲より開催の尙早なる声の盛なる中をおし切つて断然決行された。前回より僅か1年遅れたのみで5年目に開催されたが、先生の実力によつて予期以上の成果を挙げることを得た。

先生の退職前年秋、その後任について相談があり、当時の小沢外科の清水源一郎助教授を最適任者と推薦された。清水博士は阪大整形外科の教授が目の前にぶら下っている時、私にはまさか承諾されると思われなかつたが、若し実現すれば阪大の大なるプラスになることとて私が交渉に当つた。勿論これは拒絶され、清水博士はその後整形外科教授（初代）に昇進された。然し佐谷先生はこのことについては、中々諦められぬらしく、その後先生は小沢教授を南紀湯崎の宿に招待して、一旦互に就床した後夜半2時頃に、先生が小沢教授をおこし、清水博士の転向について夜中に強談判されたことは今もなお語り草に上っている。先生が泌尿器科の担任教授は外科出がよいと考えられていたことはこれによつても察知せられる。現楠教授は正にこれに該当し、先生も今や天上に於てさぞかし、ほほえんでおられることであらう。

先生は大阪に於ては随分酒を嗜まれたが、いくら飲んでも決して正体を崩すことはなく、またその直後から随分激務をも遂行された。

先生は清濁併せ呑むという大人で、難事に当つてもよく耐え、如何なることに遭遇しても適当に処置された。常に人の上に立ち、大きく叩けば大きく響き、小さく打てば小さく鳴る人物であつた。